

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

アカデミーの先生だけど

【作者名】

秋英

【あらすじ】

アカデミーの先生になったけれど任務に行かされたり。師匠になれと頼まれたり。なんやかんやの日常を繰り広げる。予定!!

テンテンを書きたくて書いたけど、テンテンが出てくるのはだいぶ先になる気がする…。

プロローグ

憂鬱だ。まさか、呼び出されるなんて…。

何の用とは言われていないが、たぶん例の件だろう。

ばれてしまうとは、さすが三代目火影。俺のやったことなどお見通しということか。

叱られるんだろうな。やだなー行きたくないなー。

なーんて思いながら扉の前に立つこと約10分。

そろそろはいった方が良くないだろうか？

というか、説教の時間が長くなる気がしてきた。

仕方ない。覚悟を決める。

「三代目、入りますよー」

一気に扉をあける。

「うむ、来たか」

「はい。それで要件話なんですよっか？」

怒られるなら怒られるで早く済ませてしまおう。

お小言を言われるのは短い方がいいだろう。

「呼んだのはほかでもない。おぬしに頼みごとがあつてな」

頼みごと？お小言じゃないのか？

掛け軸の裏にあったエロ本をこっそりと持って帰った子ではないのか？

「頼みごとというものは、実はおぬしにアカデミーの教員になってもら

「いたいのじゃが」

「アカデミーの教員ですか？」

頭の中で考えていても話は進んでいく。

いや、もう切り替えよう。エロ本をこっそり取っていったことではないのだ。

もう、このことは忘れてしまおう。きっと取ったのは俺ではないのだ。

しかしなぜアカデミーの教員に？

「実は、ナルト、例の子がアカデミーに入学したのじゃが、あの事件でナルトのことを善く思っておらん。大人たちはもちろん子供達までもがナルトのことを善く思っておらん。」

確かに親は第三次忍界大戦で死んでいたし、その時はまだ子供だったから、俺の同期はみんな前線には出ていないから、同期は普通に生きているし。

周りには言えないが、九尾の件は俺にとっては、近くで起きたが他人ことなのである。

「もうすぐ、一年になるが成績は分身の術もちゃんとできないと聞いておる。多分じゃがこの年は留年するじゃろっ」

入学してから一年立つのか。

今話を聞いていると、友達はいないだろう。てことは、一年間ぼっち生活。

楽しいのだろうかそんな生活。

考えて見たら生まれて来てから今までぼっちなのか。

俺なら発狂するな。少し尊敬してしまう。

「そこで来年のからおぬしに補助教員としてアカデミーに行ってほしいのじゃ。そしてナルトを気にかけておいてほしい」

補助教員なんて甘美な響きだろう。

給料は少なくなるが安定するし、長期休暇は出勤しなくていい。

そして、危険な任務に出なくても良い。

決めた俺は補助教員なる!!

「来年までに時間がある。今すぐに決めなくても良いから考えておいてほしいのじゃ」

「やります!!」

即答した。もう、俺の心はきまっていた。

「そうか。やってくれるか。いきなりナルトのクラスを持たせるようなことはしないが、ナルトを気にかけておいてほしい。頼んだぞ」

「わかりました。二代目お任せください」

「では春風とビキおぬしは、来年からアカデミーで働いて貰う。もちろん教員職に支障が出ない程度にわ任務には出て貰うがの」

「え？」

「なんじゃ。言ってなかったかの」

「はい。言うておりませんでした」

任務？だって俺には大切な教員生活がまだ見ぬ大切な生徒たちが涙お流しながら行かないでと叫んでいる情景が目に見えぬ。

「やって貰うに決まっているじゃろうが。おぬしは任務の成功率は高くないが、中忍であるのに武器の使い方だけは上忍と張り合えるくらいには実力があるのじゃ」

「そんな。うそ…ですよ？嘘だと言ってくださいよ。三代目!!」

働きたくない。楽な仕事が良い。危ないことはしたくない。

なんで、なんで忍者なんかになってしまったんだろ。あの頃はきつと若かたんだ。

「はあ…おぬしにはやる気というものが、致命的なまでに抜けているの。ともあれもう決まった事じゃ。諦めることじゃな。」

落ち込んでいる俺に三代目は無情にも止めの言葉をかけてくる。

今の俺には三代目が悪魔か鬼に見える。

今日は何処かでやけ食いするしかないな。

もうさっさとこの空間から抜け出したい。

よし帰ろう我が家へ!!

「三代目他に用がないなら俺は帰りますね」

俺は扉に向かって歩き出す。他に用があっても聞くものか。

「待つんじゃ」

俺を止める言葉に反射的に止まってしまっ。

「まだ何か用があるんですか？」

止まってしまったものは仕方がない。気だるそうに振り返る。

きっと今の俺の顔は火影様に向ける顔ではないだろう。

「おぬし、ワシの掛け軸の裏にあった本を…」

俺は走り出した。もう止まらない。

というか止まらない。扉を開け走り去る。

「三代目が、SMの本を持っていて、Mなんてことは知りませーん」

俺の声は木ノ葉隠れの里に響き渡り三代目の性癖が知れ渡ったのはきつと俺のせいではない。

まあ、その後5時間ほどたつぷりと叱られたのは言っまでもないだろじ。

はじめて

どうしよう？

俺はこの日から晴れてアカデミーの教員となる。

だがしかし、俺にはこの時すごく大事な問題を抱えていた。

それは、子ども達とどのように接すればいいかということだ。

アカデミーの教員の仕事引き受けておいて言うのは何だが生まれ
て来て21年、10歳近く年を離れた子と話した事がない。

だが、現実を見なければいけないだろう。

なぜならば俺は副担任を任されたのだ。

そして今、最初の難関が目の前にある。

きっと誰もが経験した事があるだろう。その名も自己紹介。

何を話したらいいのか、さっぱりわからない。

忍同士だと名前を言って、はい、終わりという感じだったからな。

「今日から君たちの担任になる。うみのイルカだ。好きな物は一楽の
ラーメン。嫌いな物は混ぜご飯だ。これから一年よろしく頼む。」

そうか、こつすればいいのか。

勉強になる。さすがはこの仕事を何年やっているかは、わからない
が先輩であり、担任様々である。

「そして、「こちらが君たちの副担任である。」

イルカ先生が俺の方を向いてくる。

落ちつけ俺、さっきイルカ先生がやったみたいにやればいいだけな
んだ。

「今日から君たちの担任になる。うみのイルカだ。あれ？」

教室が静かになっていくのがわかる。

間違えた。真似しすぎた。名前まで真似してしまうとは…。

教室どつと笑いが起きた。

顔が熱くなるのがわかる。恥ずかしすぎる。

いや、違う、これはわざとなんだ。この笑いを見る限り掴みはばっちりとした。ちしと見た。

そういうことにしておこう。しといてくれ。頼むから。

「冗談だ。冗談…ハハハ」

何人に今の言葉が聞こえただろうか？

この喧騒の中で聞こえてる人がいるのだろうか？

「コリア!! お前ら静かにしろ!!」

教室が静かになっていく。

イルカ先生が俺の前に立ち静かにするように言ってくれた。

あなたが輝いて見えて仕方がない。

「先生どうぞ、もう一度」

「はい。ありがとうございます。」

イルカ先生がもう一度チャンスをくれたんだ。

次こそは、というか一度失敗してるからか恐くない。

いや、失敗じゃないんだよ。本当に。

「じゃあ、気お取り直して、副担任になる。春風ヒビキだ。好きな物は甘い物で、嫌いな物は苦い物だ。これから一年間よろしく頼むぞ。それとさっきのはわざとだからな」

「ちよつなら。寄り道するんじゃないぞ」

「はい」

声を掛けてくれた生徒は、走り去っていく。

廊下を走っているが、嬉しくて叱る気になれない。

俺の足取りは軽く職員室に向かって歩いていった。

「ヒビキ先生、少しよろしいでしょうか？」

職員室に着くとイルカ先生に話掛けられた。

「何でしょうか？」

「これ、うちのクラスの日程です」

渡されたのは、時間割だった。

そうだ、明日から授業があるんだった。

俺が受けるわけでもないのに授業という響きが何かやる気をなくす。

「そうだ、イルカ先生。生徒の名簿ありませんか？さっきだけでは覚えきれなくて」

「ありますよ。取って来るのでちょっと待っていて下さい」

イルカ先生が名簿取りに、何処かに行ってしまった。

これで自己紹介聞いていなかった事はばれないだろう。

「ヒビキ先生、ありました。これがうちのクラスの名簿です。それと、明日の授業内容ですが」

イルカ先生と明日の授業で何をやるのか話しあつてく。といつても大体がイルカ先生が決めてくれていてサクサクと決まつていく。

大体の話し合いが決まり今日はこれで解散ということになった。だが、俺はこれだけでは終わらない。

聞いてなかった自己紹介のために名簿を見て生徒の顔と名前を一致させなければならぬ。

名簿開き顔と名前を一人ずつ覚えていく。

その中に今日、最後にあいさつをしてくれた子を発見する
朝露ミウそれがあの子の名前だ。

考えてみたら、あの時の俺友達がいなくてはじめて声を掛けられたみたいな反応してなかったか？

それか女の子に声を掛けられて浮かれてる子。

どっちも何か残念だ…

「俺はぼっちでもロリコンでもない」

一人で何言つてんだろ。悲しくなってきた。次に行こう。

一人一人の名前を一致させてく。

「げえ、日向の子がいるよ。めんどくさいな」

日向ネジ。それが名簿に書かれていた名前。

あんまり関わりたくないな。

はあー。前途多難だ。

授業を

結局昨日は途中で寝てしまい。

今日の朝、急いで名前を覚えた。

そして今、授業をしている。といつてもイルカ先生がやってるのを後ろで見学しているだけなんだが…

俺のやる事といえば、イルカ先生が問題を出してそれをわからない生徒にイルカ先生と教えていく。

しかし、イルカ先生の教え方が良いのか質問する生徒は少ない。

つまりは、暇なのだ。

働きたくないものの働きに来てまで暇というのはどうなのだろうか？

授業中であるので暇つぶしなんてできないし。

「それでは、今日はここまでとする。次は外だから遅れないようにな」

どうやら退屈な授業が終わったようだ。

そして、次からが俺の初めての授業と言っていいだろう。

昨日のイルカ先生の話だと、生徒たちを半分にして的当てをする予定なのだ。

半分に別けるということは半分はイルカ先生、残りは俺が教えるということだ。

「それでは、俺とヒビキ先生で教えるから半分に別れて貰う。そこから右は俺の方に、左側はヒビキ先生の方に別れてくれ」

イルカ先生が真中から半分を別けていく。

うっ、緊張してきた。

半分に別れた生徒たちが俺の事を見てくる。

「ヒビキ先生、イルカ先生だったけ？早く始めようぜ」

一人の少年がニヤニヤしながら言ってくる。

こいつ絶対わかっていてわざと俺の名前間違えてるな。

イラついてきた。叩いては駄目だろうか？

「駄目だよ、タロ君。そんなわざと先生の名前間違えちゃ」

ミウちゃんが少年、タロ君を叱る。

そうだ、俺は大人なのだこんなことでイラついてどうする。

子供のやることだ、大人の対応見せなければ。

「ありがとうミウちゃん。でも大丈夫だよ。タロ君も、俺の名前はヒビキっていうんだ。今度はしっかり覚えてくれると嬉しいな？」

見たかこれぞ大人の対応というものだ。

「それじゃ、タロ君の言うとうりやるとしようか」

丸太がある方を向く

「いいかい？みんな、あそこに丸太があるだろう。みんながどれだけできるか見たいからあの丸太にあてるんだ。一人5投ずつね」

生徒たちが5投ずつ順番に投げていく。

結論だけ言うと大体の子ができた。

その中で一番筋が良かったのは、テンテンという女の子だった。

あの子は多分才能あるんだろう。

逆に才能がないのはタロ君とリー君

どちらも男の子である。

頑張れ！男の子。

しかし、ロツク・リー彼は致命的なまでに、才能がない。他はどのようなかはわからないが、忍具の使い方はもう、どうやって教えられるの？という感じだ。

彼はもう13歳である。

通常はみんな13歳を目安に卒業をするのだ。

そのため2年くらい前つまり11歳から入り13歳で卒業する。

この年を逃せば同期いなくなり、彼だけになってしまう。

下忍からアカデミーに戻って来る者もいるが…。

つまり彼が卒業できるかは、俺とイルカ先生にかかっているということになる。

「はぁー、荷が重い」

タロ君は才能はなさそうだが、まだ何とかなるレベルだ。

まあ、まだ時間があるし、卒業試験の内容もわからない。

今、悩んでも仕方がない。今度考えよう。

とりあえず、今やるべきことは。

「みんな、ご苦労様。今日のは、次の授業の参考にするから、今日は解散。次の授業は教室だから遅れないようにね」

次の授業で最後なんだ頑張ろう。

「イルカ先生、少しいいですか？」

放課後リー君の事が気になり、彼の成績を聞くことにした。

「大丈夫ですけど。どうしたんですか？」

「実はリー君の成績が少し気になってしまって」

内容としては、体術の成績は良いらしいが、他はまったく駄目らしい。

今年の卒業試験が体術ならいいがその可能性は少ないだろう。

なんで教師になったばっかでごんなに悩まなきゃいけないんだ。

まだ、教師生活2日目だぞ!!

「はぁー」

今のため息は俺ではないぞ。

俺と同じように悩みを抱えているのか？同志よ!!

ため息の根元を探すと俺の隣だった。

同じ教員で名前は確か…。

「ガタイさんどうかしたんですか？」

熊野ガタイさんだ。一つ下の学年を受け持っていたはずだけど…

「ヒビキ君か、どうもごつもないよ。例のガキの事だよ」

「例のって？」

「ナルトだよ。ナルト。あいつ、人の授業邪魔しকাশないし、ほんと迷惑なガキだよ」

あつ、ナルトの事忘れてた。

三代目に気に掛けといてくれって言われてたな。

聞くんじゃなかった。

ただでさえリー君の事でいっぱいいっぱいなのにナルトの事も考えるとなると。

死ぬ。まじで死ぬ。過労死で死んでしまつ。

よし決めた。今日はもう考えるのをやめよう。

久しぶりに一楽でも行くか。

テウチのおじさんに酒でも飲みながら愚痴でも聞いて貰おう。

「今日はもう帰りますねー」

そつと決まったら迅速に行動するしかない。

職員の方々にあいさつをしてそのまま一楽へ直行!!

「おちゃん、ラーメンお代わりだってばよ」

一楽の二背に入った俺は見てしまった。

オレンジの服を着た金髪の小僧を…。

もう、帰りたい。泣いちゃいそう…。

ナルトと

考えてみれば俺の顔はナルトには知られてないじゃん。

「ここまで来たんだラーメンのいっぱいでも食わないとやってられない。」

「おう、いらしゃい!!」

「テウチさん、ラーメン大盛りで、あと酒」

ナルトから一つ離れた席に座る。

「今日、アヤメさんいないの?」

「買い出し頼んじまってよ。悪いね。またいつものあれかい?」

「あははは…まあね」

あれとは実はアヤメさんを口説いてるのだ。

口説いてるのはアヤメさんだけではないのだけど。

そもそもこの葉には美人が多いのがいけないのだ。誘惑が多すぎる。

「はいよ。お待ち!!」

俺の目の前にラーメンと酒が出てくる。

「いただきます」

「この味、そこの味が食べたかったのだ。」

「じーーーー」

視線は感じない。気のせいだ。ナルトはこっちを向いてたりなんかしない。

俺は一気に麵を噉り上げていく。

「じーーーーーーーー」

「見られてると食べずらいんだけどなー」

「いやあ、美味しそーだなーって」

「君さっきまで食べてたじゃないか」

「いやーあれだけじゃ物足りなくって、もうお金もねーしよ。あー誰か優しい人がおごってくれないかなー、チラチラ」

どうしよう？本気でうざい。特にじーとかチラとかを口で言うてるのがものすごくうざい。

いや、子どもに対して大人げない対応をとっても仕方ないし。大人の対応をすべきだろう。

「はあー仕方ないおごってあげるから、それを食べたらさっさと帰るんだよ」

「ありがとだってばよ!!おっちゃん!!」

俺はその言葉で固まってしまっつ。

「君？俺はまだ21なんだよ。まだおっちゃんなんて呼ばれる年じゃ

ないんだよ」

「う、うん。わかったてばよ、オニーサン」

まあ、合格としいてやるう。

それにしても、俺まだまだ若いはずなんだがそんなに老けて見えるのか？

もしほんとにそうだとしたら、すごくショックだぞ。

「テウチキーン、」いつに、「えーと」

何頼めばいいんだ？俺とおんなじのを頼んじゃっていいのか？

「味噌ラーメンだってばよ!!」

「それ一つ、頂戴」

はあーやっ自分のが食べる。

うっ、ちょっと伸びてる。

酒を飲まないとやってられないな。

「おっちゃんはさ、ちゃんと話してくれるんだな」

何言ってるんだこいつ？つーか、またおっちゃんって呼びやがって。

「へい、味噌ラーメン2人前お待ち!!」

ナルトにおっちゃんの部分を訂正させようと思ったら。

テウチキさんが割り込んできた。

2人前？俺は頼んでないんだが…。

「俺は頼んでないよ、テウチさん」

「おまけだよ。おまけ。お前さん、アカデミーの教師になったんだろ？祝いつてやつだよ」

「アカデミーの教師？」

ナルトが呟く。

テウチさん、あなた今ものすごく余計な事をしましたよ。

「えーおっちゃんってばアカデミーの先生だったの、でもでも見たことないってばよ」

「昨日から先生になったの。それとね、お・に・い・さ・ん！わかったか？」

「昨日からか、知らないわけだつてばよ」

「こいつ人の話聞いてんのか？聞いてないんだろなー」。

「やっばし、おっちゃんはさ、俺の話聞いてくれるんだな」

「こいつにおっちゃんを直させるのは無理なのだろうか？」

「さつきも、そんなこと言ってたな？それと、お兄さんだ」

「なんかさ、なんかさ、里のみんなは俺の話聞いてくんねーだ。みんな目も合わせてくれねーしよ。合わせたとしても変な目で見てくんだったよ」

子どもは敏感に感じ取るって言うけど…。

大人から子どもまでもが、ナルトの事を蔑んで見ている。

ナルトはいつも一人で孤独なのか、こんな子供が…。

「仕舞には例の子やあれとかで、俺を呼んできやがる。ちゃんと話してくれるのはおっちゃんにテウチのおっちゃん、アヤメのねーちゃんだけだつてばよ」

ナルトはしっかりと話せる人が3人しかいないのか。何とも悲しい。

ならば大人としてどうすれば良いのかを教えなければいけないだろう。

これからやる事は、大人として道を示す為に必要なのだ。

断じて、おっちゃん呼ばわりされてる意趣返しではない。

「いいかナルト。何故お前が里の人に嫌われているのかはわからないがな」

ナルトの頭を掴み。こちらと目を合わさせ、肩を掴み逃がさないようにする。

俺は睨みつけるように見て、ナルトを蔑んでいるこの里のものと同じような目をする。

「!!」

その証拠にナルトが声にならない悲鳴を上げている。

一瞬とはいえ心を許した者が、急に里の者たちと同じ目で見えてくるのだ。

念のためにもう一度言っておこう。意趣返しをしてるわけではな

い。

大人として道を示しているのだ!!。

「人に信頼されない限そのままだと思っぞ？だから人に信頼されるために必要な事教えてやる。まずは相手を信頼することだ。何処のどいつかを知らない奴を信頼するのはいけないが、自分が警戒して相手を信頼してないなら相手も信頼してくれる事は少ない。それと」

俺はにこりと笑う。

きつとこの笑顔を見れば女の子はいちころだ。

みたいな笑顔を浮かべている事だろう。きつと…。

「人の名前をしつかりと呼ぶ事だ。人の付き合いは名前からだ。ナルトはあれとか言われるのは嫌だろ？それと一緒に人の付き合いは名前からなんだ」

ナルトの目がうるうるしてる。

俺の話を聞いての感動ではなく、他の人と同じではないという安心からだろうが…。

「それを成し遂げるための第一歩を踏み出させてやる。俺の名前は春風ヒビキだ。お兄さんは諦めるから、せめておっちゃんではなくヒビキ先生にしといてくれ」

これでナルトも俺の事をおっちゃんとは呼ばなくなるだろう。

「わかだつてばよ。おで、みんながらじんらいざれるじのびにならから。だがらおっちゃんだけは、みがだいでくれっでばよ」

泣いていて何言ってるのかが、まったくわからないが一つだけわかる事がある。

こいつ人の話理解してないだろ。絶対またおっちゃんて言ったぞこいつ。

「ほら、顔拭け鼻水とかで、なんかすごい事になってるぞ」

おっちゃんの事注意しようとも思ったが今日は勘弁しといてやるか。

俺はそう思いながらナルトが抱きついて付いた鼻水とかどうするかを考える事にしよう。

明日も使っただけだなー…。

「……………」

面倒なのは嫌だが何もないのは、それはそれで少しさびしい。

「無いようだから、始めるぞー。最初はクナイからやる。一番の奴から投げてけー」

一番の子から二番の子、三番と順番に投げていく。
俺はそれにどんどんと点数を付けていく作業をしていく。

次はミウちゃんが、放課後に一緒に補習という名の修業を頑張ってたんだ。

頑張つて欲しいものだ。

「はっ」

ミウちゃんが投げるが的には当たるが真中には当たらない。
善くもないし悪くもない。

平均的な感じだ。

俺の教えている意味はあるのだろうか、一番最初の時とあまり変わらない気がする…。

俺、教師向いてないんだろうか、自信なくなってきた。

「んじゃー」

感傷に浸ってる場合ではない。
点数を付けなければいけないんだ。

今やったのはタロ君か。

最初の時には的に当たっていなかったのに、今は真中ではないが全
てのクナイがちゃんとの的に当たってる。

タロ君は成長が目に見えてわかるからすごくいい。
教えがいがあつていい。

流れがどんどん進んでいく。

リー君はすべてのクナイが的に当たったわけではないが、五本中三
本があたっている。

前までは一本も当たっていなかったのが、しっかりと成長してい
る。

テンテンはもう何も言うまい。
万点である。

必要なかな教師って、さっきリー君たちのおかげで取り戻した自
信がなくなっていく。

だが、時間は限られているのだ。

クナイのテストは全員終わったから、次は手裏剣のテストをしなけ
ればいけない。

落ち込むのは、後でもできる。

「次は、手裏剣のテストだ順番はさっきと同じでやる」

また、延々と点数を付ける作業が続いていく。

手裏剣といってもクナイと持ち方などが変わるだけで、そんなには
変わらない。

ミウちゃんもさっきとあまり変わらないような感じだ。

「見てろよ先生!!今度はしっかりと真中に当ててみせるからな。期待
してくれよな!!せーんせ」

そう言って、俺には何も言わずに的の前まで走っていく。
その勢いのままタロ君は手裏剣を持ち大きく振りかぶって――

「馬鹿!!そんなに力を入れたら――」

タロ君の投げた手裏剣が的とは別な方向に飛んでいく。

俺の方に二つ飛んでくる。

それを交わすと生徒の方に三つほど飛んで行ってる。

俺はクナイを取り出し生徒の方に飛んでいく手裏剣に向かい投げ
る。

クナイは手裏剣の真中にあいてる穴に入りそのまま壁に突き刺さ
る。

「怪我はないか!!」

俺は生徒の無事を確認していく。

「よし、全員無事だな」

俺はタロの方に向く。

「いいか。タロだけではなく全員聞いておけ!!クナイであったり手裏
剣であっても武器はすべて人を傷つける道具だ」

生徒たちは静かに聞いている。

俺が怒鳴っているところを始めて見て、少し驚いているようだがそ
んなのに構ってられない。

これは忍びとして、大人として武器を使うものとして伝えておかな
きゃいけない事なのだ。

「武器は人を傷つける道具であって人を守る道具じゃない。仲間を助けられる事が出来るかもしれないが、武器は武器であって人を傷つける道具であり、人を殺す道具だ。戦争のための道具だ」

俺はタロの方を向き。

タロに言い聞かせるように語りかける。

「武器の使いどころはすごく難しいんだ。だから、武器を使うときは細心の注意を払わなければいけないんだ。そうしないと、今みたいに仲間を傷つける事になるし。もしかしたら仲間を殺すことになるかもしれない。だから武器を使うときは――」

「うるせえ!!俺はただ先生に、先生に褒めて貰いたっただけなのに、なんで先生は怒ってるんだよ!!くそお!!」

「あっ、おい、待て!!」

タロを追いかけるために、走り出すが地面につまずき膨大に転ぶ。

アカデミーの生徒と言っても忍びのタマゴ、もう姿は見えず追いつけそうにない。

今の俺に出来る事とがあるなら。

「授業の続きを始める。タロの続きの者から始めれくれ」

タロの評価にゼロ点と書き、まだテストをやっていない生徒の点数を付ける事だけだろう。

感情に流され教師の仕事を放り投げていいわけではない。

ただ放課後になってもタロは戻ってこなかった。

放課後の補習の時間になっても…。

タロとの関係を壊したまま長期休暇に入ろうとしていた。

休みが

タロ君はあの日から一度もアカデミーには来なかった。家にまで行ってみたが俺とはあつてはくれなかった。そのままアカデミーは長期休暇に入り、2日目となる。

長期休暇はアカデミーでは、年に一度だけしかない。俺の時代にはそんなものは無かったが、戦争が終わり何年か経って急いで忍び育成する必要性がなくなつてから出来たらしい。

長期休暇といつても教員は仕事がある。主にアカデミーの事務仕事か任務の受付などをやったりする。だが、補助教員という立場の俺はその仕事がない。

長期休暇の初日は、タロ君の家に行き宿題やら過ごし方などを親御さんに話したり、休みであるはずがアカデミーに顔出ししたために事務仕事を手伝わされ結構忙しい日になってしまった。

2日目は家でゆっくりと家でゴロゴロする予定だったが…。

「それではおぬしに任務を言い渡す」

『休みが欲しい。長期休暇初日からやらなくてもいい仕事をやらされ俺には休みというものがないのか？』

「北の森に現れた猫の捕獲とその猫を依頼主のもとに送り届ける任務じゃ」

「ね、猫ですか？それは、Dランク、よくてもCランクの任務ですよね？俺ではなく下忍にやらせればいいじゃないですか」

「いや、Bランクなんじゃよ。その猫がちとやかいかいのお。おぬしは確か猫婆と武器などのやりとりしておったの」

「猫婆？確かにやかいかいになっていますが…。もしかして、その猫って言っつのは忍猫ですか？違いますよね？違つと言っつてくださら」

「うむ、忍猫じゃよ。そこで猫婆と面識のあるおぬしに目処が立ったというわけじゃ。猫婆のところまでは信頼された者しか行けんからのお」

『確かに猫婆の所の忍具は色々の良いのが揃ってるからお世話にはなってるけど…。忍猫って結構強いんだけど、下手したらやられちゃしよっ』

「火影様、私には荷が重すぎるよー」

「一応少々手荒くなくても良いと言われておる」

『最近話をちゃんと聞かれない事が多くなってる気がする…』

「それと、今回の任務はツーマンセルでやって貰う。入ってきなさい」

後ろの方でガチャリと扉が開く音がした。

後ろの方で失礼しますと、少し幼いような声が聞こえる。

俺は声の人物を確認するために後ろに振り向く。

「綺麗だ」

俺の口はそう呟いていた。

声の人物は少し幼いような感じがするが、かっこいいと綺麗が混ざった顔立ち。

背は女性にしては大きい方で、胸は後はもう少し欲しい。

さっきの声が聞こえていたのかうつむき顔を赤らめている。
恥ずかしがっているのだろうか？

『恥ずかしがっているところも綺麗、いや可愛いな』

彼女は顔を赤くしたまま、こちらの方へ歩いてくる。

俺の目の前まで来て

「ぐあっ」

グーで殴られた。

『な、なんで殴られたの？俺悪い事してないよね？』

「あんた何人に同じような事言っただい？紅さんとアンコさんから
あんたには気おつけるようになって、言われてるよ」

『紅さんにアンコさんなんて余計な事を、というか俺はそんなに誰彼
構わずに言ってるわけではないし。言っていたとしても今この人を
合わせて四人くらいだ！』

『と思っただけでも言える勇氣はない。』

「これ、やめんか。おぬしの気持ちわからんでもないが、任務の話がま
だ終わってらん」

『それって話が終わったらまたこの状況になるってことですかねー』

『？』

「ヒビキよ。今回おぬしと組んで貰う者じゃ」

「犬塚ハナ。獣医だよ。よろしくはあまりしたくないけど…よろしく」

「あはは…よろしく」

彼女、ハナが右手を前に出す。

握手をする気はあるようで、俺も右手を出す。

握手をしている手が痛い、きつとそれは気のせいなのだろう。

「て、獣医？」

「うむ。手荒くしても良いと言われているが、万が一の時を考えての」

「いや、そういう事では…戦闘の方は？まさか、私ひとりにやらせるなんて事は無いですよね？」

「獣医でも戦闘は出来る。だが、獣医は獣医。戦闘面ではおぬしが主体となるだろうな」

「火影様、やはり今回の任務俺ではにがおもー」

「わかったかい？そういうわけだから一時間で支度をしな。木ノ葉の門の前で集合だよ」

そう言ってハナはせつせと部屋から出ていく。

『話を聞かれなかったり、遮られる頻度高すぎだろ。もしかして俺、影薄かったりするのかな？』

「トビキよ。おぬしはもう少し自分に自信を持って。少なくとも、ワシはおぬしがやればできるといふ事を知っておる。今回の任務期待しておるぞ」

火影様まで部屋から出ていき、俺は一人取り残される。

『信頼してくれるのは嬉しいけど、無駄にプレッシャー懸けるのやめてくれませんか？火影様…』

俺は部屋の中でひっそりと目からしょっぱい汗が出てくるのを感じた。